



### 地方創生を担う拠りどころとしての活躍を期待したい

前所長 中村 俊一

3月末日をもちまして、32年間勤務しました鹿児島県を退職いたしました。3年間の県庁勤務以外は研究員として地域への貢献をめざして仕事を続けてまいりました。

所長としての1年間は、工業試験場設立から92年の歴史を引き継ぎ、県内企業の期待や信頼に応える工業技術センターをめざし、取り組みを進めてまいりました。

まず、中期業務計画の推進につきましては、業務の柱である技術支援において技術指導・相談件数は少々減少したものの、設備使用は大幅に増え、依頼試験・分析は昨年並みの実績となりました。利用者からの満足度も一定の評価をいただくことができました。

研究開発につきましては、24の研究テーマを着実に実施することができました。共同研究・受託研究は、27テーマを実施し、今後、技術移転への展開が期待できます。

企業訪問等による利用企業の裾野拡大や研究成果の技術移転については、まだまだ拡大の余地があり、今後一層の推進を期待したいと思います。

その他の取り組みとしましては、まず公設試連携が挙げられます。鹿児島・神奈川工業技術交流事業では、神奈川県産業技術センターが持つ食品の機能性評価技術の導入を図る一方、鹿児島からも技術情報を提供することができました。今後、共同研究を目指した連携が期待できます。また、九州・沖縄・山口の近隣公設試連携も着実に進めることができました。特に宮崎県工業技術センターとは今まで以上の連携をさせていただきました。南九州に位置し、食品工業に力を入れているなど進む方向性は一致するところも多く、今後の連携強化で互いのパワーアップが期待できます。

各種中小企業振興施策への対応としましては地

域企業の「ものづくり・商業・サービス革新補助金」への支援を行い、一定の成果をあげることができました。

将来に向けた検討事項としましては、まず新規分野・新規課題への挑戦が挙げられます。大島紬関連技術の新規展開のために信州大学繊維学部や農業生物資源研究所から技術情報を収集しました。改めて絹は、魅力ある素材であることを確認することができました。また、迫り来る第4次産業革命等、新しいものづくりに対応した情報収集もはじめました。

次に、大型プロジェクトの立ち上げにおいては、シラスの全量をコンクリート材料として活用する研究を、大学、県庁等関係機関の協力を得ながら必要機器の整備と研究連携を進め、大型プロジェクトとして始動を果たしました。

さらに、産業技術総合研究所との橋渡し連携につきましては、産業技術総合研究所の橋渡し強化に伴い、世界的な研究シーズを地域企業のために注入することがより容易になりました。現在、金属加工分野での橋渡しの可能性を探っているところです。橋渡しは、地域イノベーションの推進に効果的であり、重要度は高まっていくと思います。

以上、職員の真摯な業務への取り組みと関係機関や県庁からの支援もいただき、この1年間の業務を進めることができました。

今、地方創生が叫ばれています。そのためには地域の企業が元気になって地域を牽引していかなければなりません。工業技術センターの「県内企業の技術的拠りどころ」としての役割は益々重要度を増しております。今後、工業技術センターが地域にインパクトを与え、存在感を示すような活躍を期待しております。ありがとうございました。